

令和8年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育の概況	乾燥傾向で生育は緩慢であったが、3月以降の高温、降雨により、各麦種の出穂期は5日程度早まった。現在の作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	赤かび病等防除、排水対策

1 気象経過 (前橋地方気象台データの平年比、※4月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	3月	※4月
平均気温	+0.4℃	+0.8℃	+0.2℃	+2.4℃	+1.9℃	+2.4℃
降水量	17%	38%	-%	51%	118%	97%
日照時間	111%	108%	113%	101%	105%	96%

2 生育概況

(1) 概要

播種作業は概ね順調に進んでいたが、播種の遅れたほ場では土壌が乾燥していたため、出芽に時間がかかり、出芽後の生育も遅れた。11月中旬から2月中旬にかけて降水量が極端に少なく、乾燥が続いたため生育は停滞していたが、2月下旬以降、まとまった降雨があり、気温も平年より高く推移したことから生育が大幅に前進した。4月も引き続き気温が高く、出穂期は小麦、二条大麦、六条大麦ともに平年より5日程度早まっている。一部ほ場では凍霜害による軽微な不稔が見られるものの、収量への影響は限定的と見込まれる。

4月16日発表の向こう1か月の長期予報では、平年より気温が高い確率が70%と予想されており、成熟期は早まることが見込まれる。また、生育が旺盛なほ場では病害(赤かび病、うどんこ病)や倒伏の発生が懸念される。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

雑草は、播種後の降水量が少なく土壌が乾燥していたため発生が遅れているが、コアカザ、シロザ、カラスノエンドウ、ヤエムグラ、スズメノテッポウ、カラスムギ、イタリアンライグラス、ヤグルマギク(畑)の発生が見られる。一部地域でアブラムシの発生が散見される。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほ(さとのそら)のデータの平均は、播種期は11月21日(過去平均比+2日遅い)、3月20日現在の草丈が33.8cm(同124%)、茎数が1,184本/m²(同100%)、幼穂長が6.7mm(同147%)であり、出穂期は4月11日(同-5日)であった。

農業技術センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月14日播種)では、4月10日現在の草丈が61.9cm(過去10カ年平均差+0.1)、茎数が614本/m²(同90%)であり、節間伸長始期は3月15日(同-4日)、出穂期は4月13日(同-6日)であった。

(4) 作柄のまとめ

小麦の作柄は各地とも「並」であることから、県内平均作柄は「並」が見込まれる。

表1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地区	播種期	3月20日			出穂期 月日
		草丈 cm	茎数 本/m ²	幼穂長 mm	
平均	11月21日(+2日)	33.8(124)	1,184(100)	6.7(147)	4/11(-5日)
前橋市	11月22日(+2日)	35.5(147)	1,621(118)	10.0(286)	4/11(-6日)
伊勢崎市	11月24日(+1日)	31.9(128)	995(119)	7.4(151)	4/10(-6日)
高崎市	11月21日(+3日)	28.1(103)	825(80)	5.0(87)	4/12(-3日)
太田市	11月25日(-)	26.5(-)	1,447(-)	2.9(-)	4/15(-)
千代田町	11月20日(±0日)	39.6(122)	1,296(86)	4.5(109)	4/13(-7日)

※各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は過去2年、伊勢崎市は同4年、高崎市は同6年、太田市はほ場変更により過去値なし、千代田町は同4年の値。太田市は県平均から除外した。

表2 生育基本調査結果（農業技術センター、さとのそら）

播種期 月/日	幼穂形 成始期 月/日	節間伸 長始期 月/日	3月20日		4月10日		出穂期 月日
			草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²	
11/14 (-1)	3/2 (+1)	3/15 (-4)	31.8 (+4.0)	803 (84%)	61.9 (+0.1)	614 (90%)	4/13 (-6日)

* ()内は過去10年の平均に対する日数および比率(%)。

表3 農畜産課・地域農業課管内の麦類の作柄概況

地区	県平均	中部	伊勢崎	西部	東部	館林
作柄概況	並	並	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 赤かび病対策

ア 麦類のデオキシニバレノール、ニバレノール（赤かび病の病原菌が産生するかび毒）汚染防止のため、赤かび病の防除を必ず実施する。各麦種の防除適期は、小麦が開花始期～開花期（出穂7～10日後頃）と開花10～20日後、二条大麦が葎殻抽出期（穂揃期10日後頃）、六条大麦が開花始期～開花期である。2回目の防除は、1回目の7～10日後を目安に行う。

イ 倒伏した箇所や赤かび病の発生が認められた場合は、刈り分けを行い健全麦への混入を回避する。調製施設等においては、荷受け時の確認を徹底するとともに、ふるい目の拡大や比重選別機、色彩選別機等を利用して被害粒を除去する。

(2) 硬質小麦の品質向上対策

「ゆめかおり」はタンパク質含量向上のため尿素溶液の葉面散布を行う。

(3) うどんこ病・アブラムシ対策

発生状況に応じて防除を行う。「つるぴかり」「きぬの波」はうどんこ病に弱く、過繁茂のほ場で発生しやすい点に留意する。

(4) 排水対策

排水不良のほ場では排水溝の設置や手直しを行い、湿害や枯れ熟れの回避を図る。

(5) 雑草対策

収穫物に雑草種子が混入しないよう抜き取り等を行う。

(6) 災害対策等

降ひょうにより麦が脱粒し、麦種実がほ場に投入される場合は後作の施肥量の調整を行う。水稻の場合は、脱粒子実が300kg/10a程度では基肥窒素を1～2割減らし、脱粒子実が400kg/10a以上では基肥窒素を2kg/10a程度にとどめる。

(7) 収穫準備・適正収穫

ア コンバイン等の機械類の清掃を徹底し、あらかじめ済ませておく。荷受け施設

においては、麦の生育状況に合わせた稼働計画を設定する。また、登熟期の高温・乾燥は、強制登熟によって成熟がより早まる場合があることに留意する。

イ 収穫適期の目安は、穀粒水分が 25%以下になった時とする。穂首の曲がり状態で判断すると、二条大麦が 90%以上、小麦・六条大麦が 50%以上の時である。早刈りを避けて適切な穀粒水分で収穫することで、乾燥に要する経費削減につながる。

ウ 成熟期以降に長雨が予想される場合は、穂発芽を防ぐため、収穫可能なほ場についてはできる限り速やかに収穫作業を行う。

エ 収穫した麦は速やかに乾燥させ、品質低下を避ける。

【参考資料】

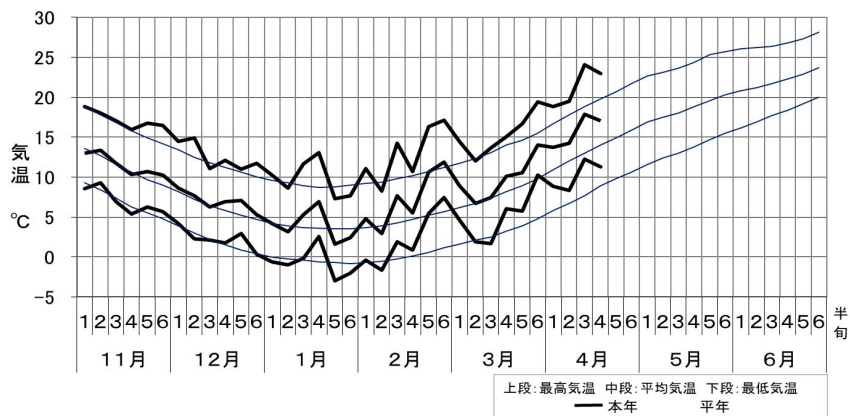


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

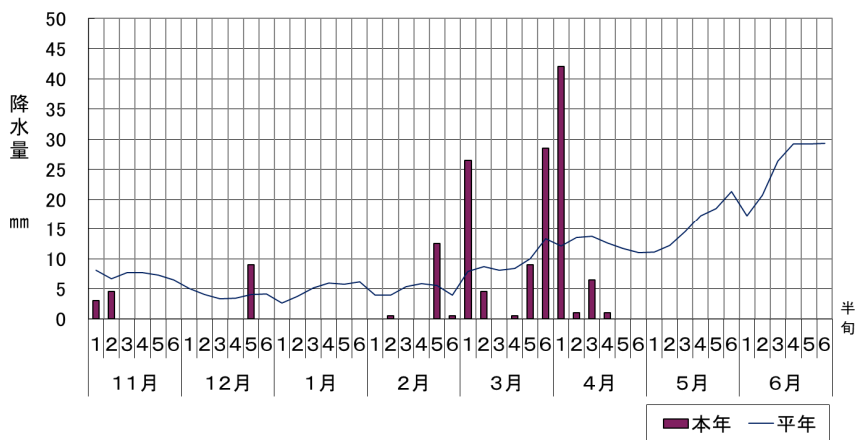


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

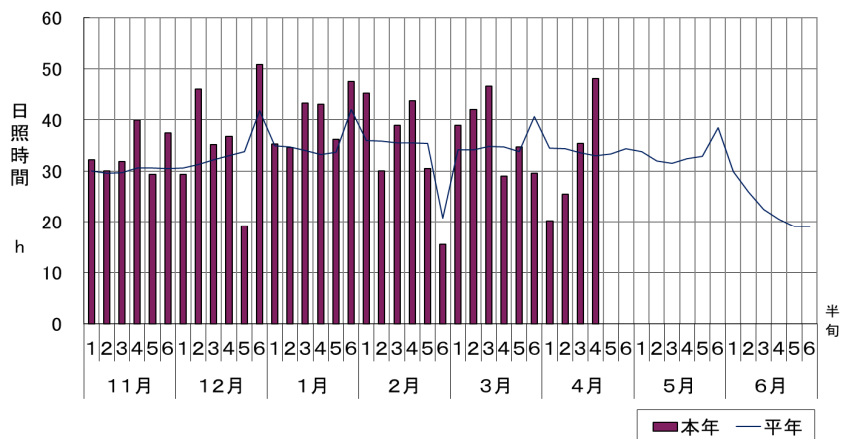


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）